

滔々と流れる川がテーマのお墓

第13回で入賞した群馬県富岡市の月田 裕さん（当時45歳）のお墓は、故郷の山を墓石に、アプローチに流れる川を表現した。

富岡で生まれ、稲含山を仰ぎ鏑川の流れに夢と遊び、一生をこの地で生きて来ました。設計士を一生の業として、多くの夢を建てて来ました。未来をカタチにして来ました。設計士に幸を感じてきました。素晴らしい人生だと思います。父の生き方に感動し、感謝した時、その生き方を語り継ぐお墓を建てようと思いました。大きな稲含山の様な父と、いつも、やさしく寄りそっていた母。その夫婦のありようを素直に表現できればと思いました。墓石には稲含山をレリーフしました。アプローチには鏑川の流れを表現しました。また、仕事で使っていた定規と鉛筆も墓石脇に配置しました。



第20回で入賞した広島県大竹市の烏田 博夫さん（当時56歳）は、山と川と海をシンプルに表現したお墓。烏田さんは語る。墓は死後の住まいであり、誰からも受け入れられるデザインであるべきだと考えます。今回、新しい墓にいくつかの墓をまとめられるようにしました。そのような墓には、誰もが入りやすく、宗教をあまり感じさせないオリジナルデザインの墓が望ましいと考えました。そのためには、誰にも共通した普遍性を重視したデザインを考える必要があります。

日本人は、死後、人は自然に還るという心情を根底に持っていると思います。そこで「自然を主題とし、それを表す山・川・海のイメージを取り入れたデザイン」をテーマとしました。



第21回で入賞した大阪府東大阪市の中垣 眞一さん（当時50歳）のお墓は、川

を桜の花びらが流れる「情緒」のあるデザイン。文字の「情」という字は中垣家を語る言葉。「ジョウ」は感情や人情にも使われ、「ナサケ」と読む事が出来る字。家族の中心でもある私の渾身の出来映えとなっています、と中垣さん。



第 22 回で入賞した山口県周南市の河村 良一さん（当時 78 歳）のお墓は、苗字の「河」、故郷に流れる川をイメージし、『河の流れのように』とした。二人の息子さんの協力など、家族が想いを込めてくれて、幸せなお墓づくりできましたと満足感を語る。

